

教育・研究シンポジウム

真木千秋……………テキスタイルアーティスト

絵よりは何か物を作りたいと言うあいまいな発想で、大学のテキスタイルコースに進んだ真木千秋はアメリカ・ニューヨークで見た面白いテキスタイルの殆どが、MADE IN JAPANだったことに強い刺激を受け、日本に戻ってから繊維メーカーで社会勉強をした。しかし、何か自分で作りたいと言う気持ちが、企業に勤めている時も常につきまとい、お金をためては、アジアを旅行していたそうである。では、なぜアジアなのかと言うと、アジアでは、日常の暮らしの中に着物が存在しているからである。そんな真木千秋がアジアの中でも特に強く引かれた国がインドである。それには、二つ理由がある。一つはインドでは、職業としての織り物がたくさん残っているということ、そして、もう一つは、タッサールシルクとの出会いがあったということである。タッサールシルクとはタンニンを含む葉を食べる蚕が吐き出すシルクの事で、当然繊維は茶色っぽい色をしている。彼女の創作活動はそのタッサールシルクを生かす織り物を追求することから始まり、作品は必然的にインドとの深いかわりの中からは生まれてくるようになっていったのである。インドでの真木千秋の仕事を紹介するスライドは、いかにインドの職人とのコミュニケーションが大切かと言うことを物語っている。彼女の物づくりは、常に、自分が着てみたいもの、触ってみたいものを中心に、自分の工房で試作をつくり、それを持ってインドに渡り、現地の職人に作ってもらうと言う方法である。日本でつくった試作をただ渡してそれと同じものつくってほしいと頼んでも、殆ど同じものはできてこない。そこで、彼女は二度織る楽しみが持てることとポジティブに考え、日本で織った試作をインドでも職人と一緒に再び織るのである。



そのような苦労が実って、現在ではインドでの織り物づくりも上手くいくようになったということである。耳の聞こえない職人がいろんな事を事細かに話してくれるという話や、出来上がってきた織り物の表情を見ただけで、いろんな職人の体調が分かるといった話は、いかにインドの職人との意思疎通が上手くいっているかという事の証でもある。今後、真木千秋は、テキスタイルを創作するだけでなく、職人との仕事を通して出来る質の良い織り物を広く紹介し、手織りの織り物の本当の良さを理解してもらうことも、自分のライフワークとして位置付けている。

(レポート 中島 良弘)

学生作品展 — マルチメディア時代へ (夢のテキスタイルトレンド展)



- ◆テーマ：コンピュータとクラフトとシーズンごとのテキスタイルトレンドを越え、マルチメディア時代の2000年に向かって、若く、新鮮な学生達の発想を生かした、夢のテキスタイルトレンドを提案しています。是非ご高覧ご批評ください。
- ◆プロデュース：大阪芸術大学 梅田 幸男

- ◆参加校(順不同)：大阪芸術大学、多摩美術大学、神戸芸術工科大学、夙川学院短期大学
- ◆協力：日本テキスタイルデザイン協会

〈感想〉

今回の展示会・シンポジウムはとても勉強になりました。他の学校の作品を見る機会がめったにないので、とても興味深く拝見することが出来ました。

コラージュの作品も思ったよりも立体的に仕上がっていて素材にもとても凝っているように思いました。思いついたこともない作品を目の前にして、個人個人それぞれの発想の豊かさを感じ、勉強になった気がします。デザインで洋服を楽しむこともできるけれど、素材で洋服を楽しむことも重要だと思いました。

手ざわりと外観、両方兼ね備えているテキスタイルというものが注目され、次々と開発されていくその過程が見れた気がします。

シンポジウムでも、私よりも何十倍としっかりした目標を持ち、自分自身に自信を持っておられる生徒の方々に少し圧倒されましたが、もう一度自分を見つめ直すきっかけになったと思いました。

夙川学院短期大学 学生